

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	大正・昭和初期の都市整備に伴う近代大阪としての都市像形成に関する研究
Title(English)	
著者(和文)	吉本憲生
Author(English)	Norio Yoshimoto
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第9517号, 授与年月日:2014年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:篠野 志郎,安田 幸一,奥山 信一,室町 泰徳,那須 聖
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第9517号, Conferred date:2014/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第		号	学位申請者氏名		吉本 憲生	
論文審査 審査員		氏 名		職 名		氏 名	職 名
	主査	篠野 志郎		教授		那須 聖	准教授
	審査員	安田 幸一		教授	審査員		
		奥山 信一		教授			
		室町 泰徳		准教授			

論文審査の要旨（2000 字程度）

本論は、「大正・昭和初期の都市整備に伴う近代大阪としての都市像形成に関する研究」と題し、以下の 7 章から構成されている。

第 1 章「序論」では、近代大阪に関する既往研究として、近代の都市整備の実施内容・制度や、或いは行政や都市計画家をも含めた整備実施者の理念・構想を検討したものが大部を占め、更には都市内の地域像についても、検討対象地が大阪市街地南部に限定される傾向にあることから、近代大阪の都市域への包括的視点が欠如している点を指摘し、都市整備に伴う都市像の形成過程及び、都市像の保有主体としての都市整備の実施者と、受容者である住民との関係については看過されてきたことを研究の背景として批判的に捉え、本研究目的が、近代大阪の変貌著しい時期である大正・昭和初期の対象時期において、都市整備の実施に伴い、実施者・受容者の交渉を通して形成される、近代大阪の都市像について明らかにすると共に、それを史的に評価することである点を述べている。

第 2 章「近代大阪における都市整備及び実態的都市空間」では、近世・明治期・大正・昭和初期にかけて大阪の実態的な都市空間の変遷について、都市領域・街路網・景観の 3 つの観点から検討した結果、近世大坂の空間構造・景観が保持されていた明治期に対し、大正・昭和初期においては、都市整備の実施に伴い、近世から継承された空間構造が遺棄されると共に、企業施設としての高層建築が景観の中に出現したことを指摘し、御堂筋を中心とする新たな都市の空間構造が実態として形成されたことを明らかにしている。

第 3 章「大阪都市協会の機関雑誌『大大阪』にみる実施者による都市像」では、都市整備の実施者を読者・執筆者とする大阪都市協会の機関雑誌『大大阪』の記述を分析した結果、従前の私的領域の集合としての都市像が遺棄され、公的な領域の中に資本の運動を取り込むことを企図する新たな都市像が提示された点を指摘し、大正・昭和初期の都市整備の中心的地域であった御堂筋・大阪駅周辺の地域像として、『大大阪』の目指す先鋭的な都市像が顕在化されたことを明らかにしている。

第 4 章「郷土誌・新聞にみる受容者による都市像」では、都市整備の受容者を読者・執筆者とする郷土誌『上方』、及び『大阪毎日新聞』・『大阪朝日新聞』の記述について検討した結果、『上方』では近世文化が重視されることで、道頓堀に代表される共同体の領域、及びそれを統括する世俗権力の象徴としての大阪城、更には超俗性の象徴としての四天王寺によって形成された歴史的都市像が呈示されると共に、都市像の拠点となる道頓堀に関して、大阪外部の文化が資本家により移植されたのに伴い、従前の共同体領域の解体される過程が意識化されており、加えて新聞では御堂筋・大阪駅周辺を中心とした、資本の運動の場へと都市像を再編成していることから、昭和初期の受容者は、当時の都市・大阪を資本家による経済活動の場と捉えていた点を明らかにしている。

第 5 章「都市整備に関する訴訟にみる実施者と受容者の場所評価の差異」では、大正・昭和初期の大阪における都市整備を契機として、実施者である行政と受容者の間で生じた訴訟の内容について穿鑿した結果、大規模都市整備地域の御堂筋・大阪駅周辺に訴訟が集中する点を指摘し、裁判記録の詳細な読解を通して、内在化された言表体系を分析で顕在化させることで、資本家によって経済的な利益が独占される中心地と、それに従属する周縁地という空間構造の出現が、住民において意識化されたことを明らかにしている。

第 6 章「地域像の階層的集合による都市像の形成過程」では、前章までの検討を総合し、近代大阪の都市像とは、大阪市という公的主体を表象する大阪駅周辺と、経済活動を表象する御堂筋とが開発行為で連続した都市空間として出現することに伴い、当該都市空間が都市の経済活動の表象記号として普遍的地域性を獲得した広域的外部文化と連携する共時的空間構造に、歴史的固有性を内在させた通時的空間構造を従属させることで、大正・昭和初期の大阪の都市空間が階層的に構造化された過程を明らかにしている。

第 7 章「結論」では、以上を総括して、本論の結論を述べている。

以上を要するに、本論文は、都市整備の実施者・受容者の関係に注目し、これまで等閑視されてきた、大正・昭和初期の都市整備の実施に伴う近代大阪としての都市像の形成について多面的に検討し、既往の近代大阪の都市史研究に対し、広汎な史料の渉猟と批判的分析により、近代化する都市空間が公的かつ資本の運動の場である流動的空間と静的な歴史的空間の相克により、近代的都市像が形成される機構を実証的に明らかにしており、斬新な視点と解析手法から都市史研究への新たな知見と可能性を呈示しているもので、本研究の成果は、建築学・都市計画学、及び工学において大いに貢献するものと思量されることから、本論文は博士（工学）の学位論文として十分価値のあるものと判断される。